

第一部 皇朝錢収集ガイド

目次	頁
1. 皇朝錢の魅力	1
2. 発掘場所別皇朝錢	2
3. 皇朝錢の稀品	
(一) 母錢と錢範	3
(二) 富本錢	4
(三) 古和同銀・銅錢	5
(四) 皇朝十二錢	6
4. 皇朝錢とは	8
5. 天皇家と蘇我氏・藤原氏の主要系譜	9
6. 宮都の変遷と皇朝錢の発行	10
7. 歴史書に見る古代の初期貨幣	11
8. 皇朝錢の発行	
一、無文銀錢	12
二、富本錢	13
三、古和同開珎銀錢	14
四、古和同開珎銅錢	15
五、新和同開珎	16
六、萬年通寶、大平元寶、開基勝寶	17
七、神功開寶	18
八、隆平永寶	19
九、富壽神寶	20
十、承和昌寶	21
十一、長年大寶	22
十二、饒益神寶	23
十三、貞觀永寶	24
十四、寛平大寶	25
十五、延喜通寶	26
十六、乾元大寶	27
9. 皇朝錢の鑄錢地	28
10. 富本錢の発掘ニュース	29
11. 皇朝錢の掘出し	30
12. 皇朝錢の収集方法	32
13. 皇朝錢の真贋判定	33
14. 皇朝錢の変造錢の鑑識	37
15. 収集に必要な参考書籍	39
16. 拓本の採り方	40
17. 古錢書に見る皇朝錢の分類名の変遷	41
18. 皇朝錢収集に必要な用語の解説	49
19. 各部位の名称と錢文の読み方	56

第二部 皇朝銭分類ガイド

	目次	頁
I.	皇朝銭分類の基準	59
II.	皇朝銭分類表記の方法と分類図解の説明	61
III.	皇朝銭の分類	
分類No.		
	一、無文銀銭の分類体系	63
1	① 無文銀銭	64
	二、富本銭の分類体系	65
2	① 正字	66
3	② 狭大	67
4	③ 異書	68
	三、古和同開珎銀銭の分類体系	69
5	① 大字	70
6	② 小字	71
7	③ 縮字	72
8	④ 笹手	73
9	⑤ 広穿隸開	74
10	⑥ 広穿不隸開	75
11	⑦ 隸開	76
12	⑧ 隸開の不隸開	77
	四、古和同開珎銅銭の分類体系	78
13	① 大字	79
14	② 小字	80
15	③ 縮字	81
16	④ 笹手	82
17	⑤ 広穿隸開	83
18	⑥ 広穿不隸開	84
19	⑦ 隸開	85
	五、新和同開珎の分類体系	86
20	① 中字	87
21	② 中字広穿	88
22	③ 中字細字	89
23	④ 大字	90
24	⑤ 小字	91
25	⑥ 小珎	92
26	⑦ 小珎離島珎	93
27	⑧ 長珎長頭和	94
28	⑨ 長珎	95
29	⑩ 降和	96
30	⑪ 降和大玉珎	97
31	⑫ ノ木和同	98
32	⑬ 小様ノ木	99
33	⑭ 四つ跳	100
34	⑮ 三つ跳	101
	六、萬年通寶の分類体系	102
35	① 直通	103
36	② 直通小頭通	104
37	③ 直通円点	105
38	④ 狭通	106
39	⑤ 狭通円点	107
40	⑥ 広通	108

41	⑦ 広通小頭通	109
42	⑧ 広通門点	110
43	⑨ 横点大潤縁	111
44	⑩ 横点潤縁	112
45	⑪ 横点中潤縁	113
46	⑫ 横点中縁	114
<hr/>		
	七、大平元寶の分類体系	115
47	① 大平元寶	116
<hr/>		
	八、開基勝寶の分類体系	117
48	① 開基勝寶	118
<hr/>		
	九、神功開寶の分類体系	119
49	① 力功	120
50	② 力功不力	121
51	③ 縮力	122
52	④ 大様大字	123
53	⑤ 中様大字	124
54	⑥ 中様大字欠門開	125
55	⑦ 長寶	126
56	⑧ 側功	127
57	⑨ 側功下狭開	128
58	⑩ 長刀	129
59	⑪ 長刀欠門開	130
60	⑫ 長刀下張開	131
61	⑬ 長刀長寶	132
<hr/>		
	十、隆平永寶の分類体系	133
62	① 大様巨字	134
63	② 大様	135
64	③ 大様長頭永	136
65	④ 大様狭永	137
66	⑤ 大様平永	138
67	⑥ 大字	139
68	⑦ 大字細字	140
69	⑧ 中字広郭	141
70	⑨ 中字	142
71	⑩ 中字湾柱永	143
72	⑪ 狭穿長平	144
73	⑫ 広穿長平広郭	145
74	⑬ 広穿長平	146
75	⑭ 小字降寶	147
76	⑮ 小字	148
77	⑯ 小字降平	149
78	⑰ 小字長フ永	150
79	⑱ 二水永大字	151
80	⑲ 二水永中字	152
81	⑳ 二水永小字	153
<hr/>		
	十一、富壽神寶の分類体系	154
82	① 大様大字	155
83	② 大様壽貫	156
84	③ 小字大申	157
85	④ 小字小申不接培	158
86	⑤ 小字小申接培	159
87	⑥ 小字小申大潤縁	160
88	⑦ 小字細縁大字	161
89	⑧ 広穿	162
90	⑨ 示神	163
91	⑩ 示神大字	164

	十二、承和昌寶の分類体系	165
92	① 大様大字	166
93	② 大様小字大潤縁	167
94	③ 小字	168
95	④ 小字短フ	169
96	⑤ 小字長フ	170
97	⑥ 小字俯口	171
98	⑦ 小字仰口	172
	十三、長年大寶の分類体系	173
99	① 大様大字	174
100	② 大様大字長寶	175
101	③ 小字	176
102	④ 小字斜大	177
103	⑤ 小字狭年	178
104	⑥ 小字狭大	179
105	⑦ 小字小大	180
	十四、饒益神寶の分類体系	181
106	① 大様大字小申	182
107	② 大様大字	183
108	③ 小字	184
109	④ 小字右神	185
110	⑤ 小字左神	186
	十五、貞寛永寶の分類体系	187
111	① 張足貞	188
112	② 張足貞進貞	189
113	③ 張足貞長頭永	190
114	④ 直足貞	191
115	⑤ 直足貞進貞	192
116	⑥ 直足貞狭永	193
117	⑦ 直足貞大字	194
	十六、寛平大寶の分類体系	195
118	① 小字	196
119	② 小字爪寛	197
120	③ 潤大	198
121	④ 潤大広穿	199
122	⑤ 狭平	200
123	⑥ 方冠	201
124	⑦ 延寛	202
125	⑧ 延尾寛	203
	十七、延喜通寶の分類体系	204
126	① 大様大字	205
127	② 大様	206
128	③ 小字	207
129	④ 小字昂延通	208
130	⑤ 小字短尾延	209
131	⑥ 小字短尾通	210
	十八、乾元大寶の分類体系	211
132	① 短元	212
133	② 短元長寶	213
134	③ 長元	214
135	④ 昂長元進大	215
136	⑤ 接郭	216

五、新和同開珎

発行に至るまでの経緯

新和同開珎の発行時期は『続日本紀』和同2年(709)8月2日「銀錢を廢めて銅錢を行わしむ。」の頃で、ちょうど平城京の造営時期にあたる。新都造営のための労賃支払用に発行されたものである。新都に流通する貨幣は、大量生産に向くよう鑄造技術が格段に進歩した鑄錢所で鑄造された新しい貨幣が相応しい。新和同開珎の鑄造開始は『続日本紀』和同元年(708)7月26日「近江国に銅錢を鑄造させる。」の頃に該当する。同書の和同元年8月10日「始めて銅錢月を行う。」の銅錢とは古和同銅錢であるから、7月26日を古和同銅錢を鑄造させたとする見解もあるが銀錢発行後僅か二週間で古和同銅錢を発行するには無理がある。銀錢を止めて銅錢に切替えるためには大量の銅錢の造り溜めが必要である。従って古和同銀錢と銅錢は同時並行で鑄造され、発行時期をずらしたのである。

一方新和同開珎は来るべき銀錢廢止の時代に備え、新和同開珎の造り溜めをしていたのである。

新和同開珎の発行目的

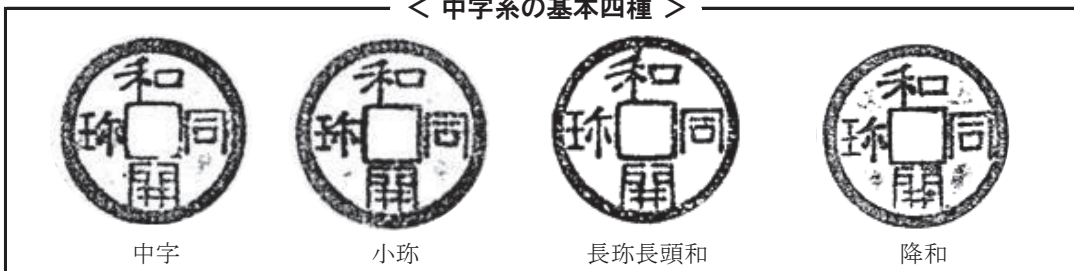
古和同銅錢には必ず同字体の銀錢が存在する。その理由は先に銀錢を発行し、貨幣に慣れた頃に既に鑄造されていた同字体の銅錢を発行するという銅貨幣の流通を狙って発行されたからである。一方新和同開珎は古和同開珎とはその発行目的を異にする。新都での本格的な貨幣流通経済を目指し、大量に鑄造して発行するために新しい姿の錢に変えて発行されたのである。

古和同開珎銅錢が稀少錢となった原因

新錢発行後古和同銅錢は専ら原料銅として市場から回収され殆どが姿を消してしまった。

近年の研究では初期鑄造とみられる新和同開珎に古和同開珎と金属成分が酷似している錢が発見されており、古和同開珎は原料銅として回収されたとする説を裏付けている。

< 中字系の基本四種 >



三貨同価時代に発行された後期発行の新和同開珎

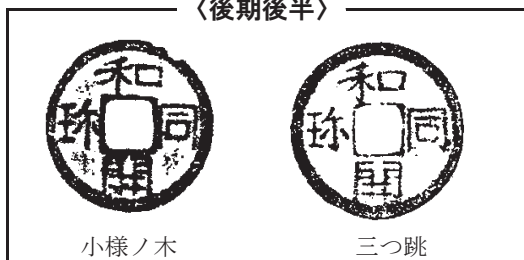
新和同開珎の中に上記中字系の字体の域をはみ出した後期鑄造の四種の錢がある。これらは神功開寶の流通時期に発行されたとされている。根拠は、先の中字類と字体が極端に異質であること。琵琶湖の沖ノ島での皇朝錢の大量発掘において、この四種の貨幣が多量に含まれており、萬年通寶や神功開寶が並行使用されている時代に使用されていたとの確証が取れたこと。

『続日本紀』宝龜10年(779)8月15日「新旧錢を同価として並行使用する。」とあることや、造りが萬年通寶や神功開寶に近似していることなどである。また四種のうちノ木和同と四つ跳は前・中期の神功開寶に、小様ノ木と三つ跳は後期の神功開寶に近似しているので前半と後半に二分した。発行期間は779年から隆平永寶発行の796年までの間とするのが通説である。

< 後期前半 >



< 後期後半 >



古和同銅銭 / ① 大字

収集泉影数 29

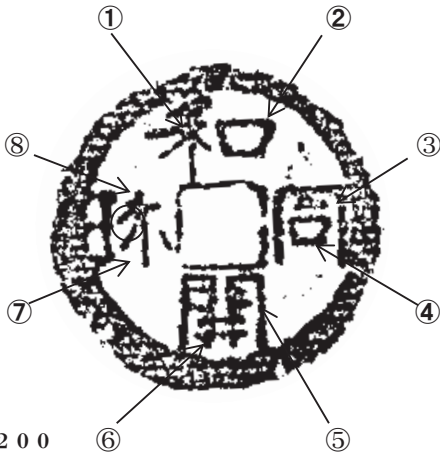
稀少度 (8ランク) ☆☆☆☆☆☆☆

特徴
 ◇狭穿、潤縁で背中郭系
 ◇特に和の口が大きく開の背丈が高い
 ◇鑄溜銭や欠け銭が多く美銭が少ない
 ◇金質は粘りのある黒褐色
 ◇四文字とも雄大に書かれている

解説

大字は古和同銅銭の中で隸開に次いで現存数の多い銭種である。四文字とも雄大に書かれており、字体は毛筆で書かれた雰囲気がある。現存数が少ない割には銭径や重量に大変バラツキがある。古拓本は結構見るが実見する機会が極めて少ない。伝世している銭は少ないのであろう。古拓本で見る限り美銭は半数に満たない。

面



×約200

面の鑑識ポイント

- ① 和の禾が縦長で、背丈が高い
- ② 和の口が大きく、極端な逆台形
- ③ 同がやや縦長
- ④ 同の口が逆台形で上がり、進む
- ⑤ 開の門構えの背丈が高い
- ⑥ 開の井が横広で、上がる
- ⑦ 珍の尔の両点が長く、ハの字になる
- ⑧ 珍の王と尔が繋がり、王と尔の書出しが並ぶ

背 潤縁、中郭系

銭径 23~25mm台

重量 3~5g台

類似銭との瞬時判定

小字 ⇒ 小字は和の口がやや小さくて開の背丈が低く、開の前柱の下部が陰起している。
 隸開 ⇒ 隸開は珍の尔が王偏より降り、同の口の右側に空間があり広穿。

種類	潤縁大様	潤縁大様	中縁中様	手変わりメモ
泉影	 背中郭	 背細郭	 背中郭	◎輪 潤縁~約6割 中縁~約2割 細縁~約2割 ◎背郭 広郭~約2割 中郭~約5割 細郭~約3割 ◎銭径 大様~約6割 中様・小様~約4割 小様銭は細縁で背細郭のものが多い。 ◎その他 銭径や重量、字体に変化が多い。 後世の絵銭や祝鑄銭との見間違いが多い。 後世の贋作銭が非常に多い。金質が硬いものや使用痕、摩耗や青錆のないものに注意。 これは古和同銅銭全般に言えることである。 所在不明の銭がかなりあるので出現を願う。
泉書	銭幣考遺 (文化04) 中外銭史 (天保02)	古泉大全 (明21) 昭和泉譜 (昭06)	古泉大全 (明21) 泉林堂泉譜 (明28)	